

(第3種郵便物認可)

サイ・テク
こらむ 知と技の発信

【602】

埼玉大学・理工学研究の現場

STAP細胞の研究不正が大きな騒動になってからも10年以上がたちました。それについて思ったことを当時本欄に執筆しましたが、今も状況は何ら変わっていません。自戒を込めてその小文をここに再掲したいと思います。

あの研究不正の騒動からはつきりと分かったことは、正しくない科学であっても人はあれほど面白がることのできる、ということ

です。成果発表から不正が疑われ始めるまでの間、専門家から門外漢まで、ほとんどの人が研究内容の面白さを手放して称賛していました。科学研究において、「面白いかどうか」はその価値を決める最も重要なファクターと考えられています。「あなたの研究はとも

面白い」と言われて喜ばない研究者はいません。逆に、「正しいが面白くない研究」は研究者にとって侮辱の言葉とされています。そして、あの騒動を経ても、科学の「面白さ至上主義」は微動だにしてい

ません。科学としての正しさは当然の前提条件であって、面白さや、それに加えて新規性、有用性を追求することが科学研究の営みであり続けています。

しかし、単なる前提の当たり前のものとして扱えるほど、科学的に「正しい」ということは簡単なものではありません。実際に、騒動の渦中には、世界的に著名な超一流といわれる科学者が複数いました。超一流であるにもかかわらず、研究内容が正しくないとい

学の面白さと正しさ
山口祥一 教授



ことを事前に見抜くことはできませんでした。一方で、不正の発見に主要な貢献をしたのは、当該分野とその周辺の多数の研究者や関係者でした。そのような方々のほとんどは、恐らく超一流とは呼ばれていない普通のひとと予想されます。このことは大変示唆に富んでいます。科学的な正しさを保つのに必要なのは、少数の超一流研究者でなく、多数の普通の人々です。正しいかどうかを見極めるには、頂にいた天才数人よりも、裾野の凡人数万人の方がはるかに有効です。頂をより高く、真理により近づけるためには、広い裾野が必要なのです。

これが積み上げられてきたものが正しいならば、正しくないものが新しく面白いとされて持てはやされることがまれに起るのには致し方ないことでしょう。ただ正しいだけのものが、当たり前のつまらないものと見なされるのも、ある意味当然のことです。

しかし、正しいかどうか、ということは決してないがしろにされてはいけません。面白いかどうか、役に立つかどうか、新しいかどうか、すごいかどうか、ということだけに過剰に重きを置いた研究の成果は、短命に終わるに違いありません。真理を愚直に追求する多数の普通の研究者が、正しい科学を生き残らせてその発展を支えています。

やまぐち・しょういち 1968年2月生まれ。92年3月東京大学大学院理学系研究科修士課程修了。博士(理学)。神奈川県立科学技術アカデミー(研究員)、東京大学大学院総合文化研究科(助手)、三菱化学横浜総合研究所、理化学研究所(専任研究員)を経て、2014年4月から埼玉大学大学院理工学研究科教授。専門はレーザー分光による物理化学。